

## 『宋詩別裁集』に収録された北宋初期の詩人たちの七言絶句

三野 豊 浩

### 〔要旨〕

清代の張景星らによって編集された『宋詩別裁集』全八巻は、宋代の詩人一三七人の作品合計六四七首を、形式別に収録している。巻一は五言古詩、巻二と巻三は七言古詩、巻四は五言律詩、巻五と巻六は七言律詩、巻七は五言排律、巻八は五言絶句と七言絶句を、それぞれ収録している。本稿は、そのうち巻八に収録された北宋初期の代表的な五人の詩人たち、王禹偁、魏野、林逋、宋祁および石介の七言絶句合計六首を研究の対象とし、解説するものである。

〔キーワード〕『宋詩別裁集』、宋詩、北宋、七言絶句、王禹偁、魏野、林逋、宋祁、石介

### はじめに

清代の張景星らによって編集された『宋詩別裁集』全八巻は、宋代の詩人一三七人の作品合計六四七首を、形式別に収録している<sup>(1)</sup>。巻一は五言古詩、巻二と巻三は七言古詩、巻四は五言律詩、巻五と巻六は七言律詩、巻七は五言排律、巻八は五言絶句と七言絶句を、それぞれ収録している。このうち巻八は、二十六人の五言絶句五十四首と、三十七人の七言絶句九十七首を、それぞれ収録している。本稿は、そのうち北宋初期の代表的な五人の詩人たち、王禹偁、魏野、林逋、宋祁および石介の七言絶句合計六首を研究の対象とし、解説するものである。作業にあたっては、以前研究ノート「『宋詩別裁集』に収録された陸游の七言絶句」を発表した時と同様、乾隆二十六年（一七六一）誦芬楼刊本の影印本『宋詩別裁集』（二九七五年十一

月、中華書局)を底本とし、『宋詩別裁集』(一九七八年十月、上海古籍出版社。簡体字縦書、『宋詩別裁集』(一九九七年八月、河北人民出版社。簡体字横書)をあわせて参照した。この他、必要に応じて『宋詩紀事』(一九八三年六月、上海古籍出版社、『宋詩鈔』(一九八六年十二月、中華書局)、『全宋詩』(一九九一年七月〜一九九八年十二月、北京大學出版社)などを参照した。詩の表記は、すべて新字体新仮名遣いとした。

一、王禹偁(二首)

王禹偁(九五四〜一〇〇二)、字は元之。鋸野(山東省済寧)の人。『小畜集』がある。北宋初期の著名な文人で、官は翰林学士、知制誥に至る。剛直な性格で国事に強い関心を示した。たびたび直言しては為政者の機嫌をそこね、生涯に三度の左遷を経験。咸平四年(一〇〇二)、左遷先の蘄州(湖北省蘄春)で、四十八歳で没した。唐代の杜甫、白居易の詩を推奨する一方、当時の詩壇で流行していた浮華な詩風に反対し、北宋の詩文革新運動の先駆者となった。『宋史』巻二九三に伝がある。

泛吳松江 吳松江に泛ぶ 王禹偁

この詩は、王延梯『王禹偁詩文選』(一九九六年七月、人民文学出版社)によれば、雍熙二年(九八五)、長洲(江蘇省蘇州)

知県在任中の作。時に作者三十二歳。『宋詩鈔』の『小畜集鈔』、『宋詩紀事』巻四、および『千首宋人絶句』巻一にも収録されている。

●○○●●○○○  
 葦篷疎薄漏斜陽 葦篷 疎薄にして 斜陽を漏らし

○●○○●●●●○  
 半日孤吟未過江 半日 孤吟するも 未だ江を過ぎず

○●○○●●●●○  
 唯有鷺鷥知我意 唯だ鷺鷥の我が意を知るのみ有り

○●○○●●●●○  
 時時翹足对船窓 時時に足を翹げて船窓に対す

〔韻字〕 陽(下平声七・陽韻)、江、窓(上平声三・江韻)、通押

『吳松江に小舟を浮かべて』  
 葦で織つたと、まは薄くまばらで、夕陽の光を漏らしている。半日もの間、舟の中で一人詩を吟じていても、まだ吳松江を通り過ぎない。ただ白鷺だけが私の気持ちをわかってくれると見え、しきりに足を持ち上げては挨拶しているのが、小舟の窓から見える。

まず詩題について。「泛」は、舟を浮かべる。『宋詩紀事』は「汎」とする。「呉松江」は、蘇州の近くを流れる川の名。「呉淞江」とも書く。鱸が特産で、西晋の張翰が呉中の鱸魚の膾を思い出して帰郷したという『世説新語』識鑑篇の故事はよく知られる。

第一句。「葦篷」は、葦で織った舟のとま。影印本は「篷」を「蓬」とするが、簡体字の『宋詩別裁集』を参考にして改めた。なお『宋詩紀事』は「帶篷」とする。「疎薄」は、まばらで薄いこと。まばらな舟のとまから、夕陽が漏れているのであろう。

第二句。「半日孤吟」という表現から、詩人が船出したのは朝早い時間であったと推測される。南宋・陸游の『入蜀記』を見ても、出発はおおむね夜明けの前後であり、北宋の王禹偁の旅もほぼ同様と考えてよからう。「未過江」は、まだ呉松江を通過しない、の意。詩人の舟が呉松江の流れに沿って進んでいるのか、それとも流れに逆らって進んでいるのか、必ずしも断定できないが、いずれにせよ、のんびりした船旅であることは間違いない。作者は小舟の中で時間を持て余しているかのようでもあり、そうした状況を楽しんでいるかのようでもある。

第三句。「鷺鷥」は、鳥の名。白鷺。北宋・歐陽修には「鷺鷥」と題する七言絶句が二首あるが、そのうち『歐陽修全集』（二〇〇一年三月、中華書局）巻十一に収録された一首の前半は、次のようにうたう。

風格孤高塵外物  
性情閑暇水辺身

これらの詩句から、白鷺には、超俗、潔白、孤高、閑雅、といったイメージが付与されていることが理解されるであろう。また蘇州に隠退した北宋・蘇舜欽の七言律詩「過蘇州」の頷聯（第三四句）は、次のようにうたう。

緑楊白鷺俱自得  
近水遙山皆有情

この詩は、清末・民国・陳衍の『宋詩精華錄』巻一に収録されており、陳衍はこの二句に圈点を施した上で「三四（右の二句）は是れ蘇州の風景なり」と評している。してみると白鷺は、時代が下つても蘇州の風物として定評があったことがわかる。では王禹偁はなぜ「白鷺」と書かずに「鷺鷥」と書いたのか、であるが、それはおそらく平仄の都合によるであろう。王禹偁のこの詩の場合、「唯有白鷺知我意（○●●●○●●●）」としたのでは、偶数番目の文字がすべて仄字となつてしまい、「二四不同二六対」の原則に反することになる。それで、四字目にはどうしても平字の「鷺」が必要になるのである。

第四句。「時時」は、しきりに。「翹足」は、足をつまだてる。足の長い鳥が、水辺で足を持ち上げるしぐさを描写しているの

であろう。「対船窓」は、文字通りには「船の窓に向き合う」の意味であるが、白鷺が作者の乗っている小舟の窓辺にとまっているわけではあるまい。ここでは、船窓から見える遠景として解釈した。

この詩は、孤独な船旅の情景をうたうばかりで、その具体的な背景を一切語らないが、『宋詩紀事』巻四はこの詩の前後に七言律詩「松江」、五言律詩「移任長洲」二首を配している。これらの詩をもあわせて読むならば、同地へ赴任した作者の心境が、より具体的に理解されるであろう。参考までに、「移任長洲」の其一は、次のようにうたう。

移任長洲景	任を長洲景に移せば
舟中興有余	舟中興余り有り
篷高猶見月	篷高くして猶お月を見
棹穩不妨書	棹穩やかにして書を妨げず
雨碧蘆枝亞	雨碧にして蘆枝亜なく
霜紅蓼穗疎	霜紅にして蓼穗疎らなり
此行紆墨綬	此の行墨綬を紆らすは
不是為鱸魚	是れ鱸魚の為ならず

春居雜興<sup>(5)</sup>

春居雜興

王禹偁

淳化二年（九九二）、王禹偁は商州 団練副使に左遷された。

宋代の副使は名目だけの閑職で、実質は流罪に等しい。『宋詩紀事』によれば、廬州の妖尼道安なる者が徐鉉を訴えた際、王禹偁は徐鉉を弁護し、道安の罪を問うべきことを請願した。このことが原因で左遷されたのだという。次の詩は、その翌年淳化三年（九九二）、商州（陝西省商州）での作。時に作者三十九歳。二首連作の其一で、『宋詩鈔』の『小畜集鈔』は二首すべてを収録し、『宋詩紀事』巻四および『千首宋人絶句』巻一は其の一のみを収録している。

●○○●●●○○	兩株桃杏映籬斜	兩株の桃杏	籬に映じて斜めなり
○○●○○●●○	粧点商山副使家	粧点す	商山 副使の家
○○○○○○●●	何事春風容不得	何事ぞ	春風 容るるを得ず
●○○●●●○○	和鶯吹折数枝花	鶯に和して	数枝花を吹き折るや

〔韻字〕 斜、家、花（下平声六・麻韻）

《春のわび住まいにおける雑感》

桃の木と杏の木が一株ずつ、家の垣根から斜めに生え出て、商山の副使のわび住まいにささやかな彩りを添えている。と

ころが一体どうしたことが、春風はそれを許してはくれず、ウグイスの鳴き声もろとも、花の咲いている数本の枝を吹き折ってしまったではないか。

まず詩題について。「春居雜興」は、春のわび住まいにおけるさまざまな感興、の意。『宋詩紀事』は詩題を「春日雜興」とする。

第一句。「兩株桃杏」は、桃の木と杏の木がそれぞれ一本ずつで「兩株」なのであろう。「映籬斜」は訳しにくい表現であるが、二本の木が垣根から斜めに顔をのぞかせている様子が、ひとときわ鮮やかに見える、ということであらうか。

第二句、「粧点」は、装う。彩る。『宋詩紀事』は「装点」とする。「商山」は、前述の商州。同地は山間の僻地なので、このように言う。『宋詩紀事』は「商州」とする。「副使」は、前述。王禹偁の官名。

第三句。「何事」は、一体どうしたことが。「容不得」は、ゆるさない。容認しない。

第四句。「和鶯」は、ウグイスの鳴き声と一緒に。せつかくの美しい花を、春風が無慈悲にも吹き散らしてしまったことを、恨みがましくうたっている。

ところで、南宋・胡仔の『苕溪漁隱叢話』および南宋・陸游の『老学庵筆記』に、王禹偁のこの詩に関連する記事が見えるので、簡単に紹介しておこう。まずは『苕溪漁隱叢話』前集卷

二十五「王元之」に引用された『蔡寬夫詩話』の記述である。

元之本学白楽天詩、在商州嘗賦「春日雜興」云……。其子嘉祐云、「老杜嘗有『恰似春風相欺得、夜来吹折数枝花』之句、語頗相近」、因請易之。王元之忻然曰、「吾詩精詣、遂能暗合子美邪」。更為詩曰、「本与楽天為後進、敢期杜甫是前身」。卒不復易。

王禹偁はもとより白楽天の詩を学んでおり、ある時商州で「春日雜興」の詩を賦し、……とうたつた。その息子の王嘉祐が王禹偁に「杜甫に『恰かも春風の相い欺き得たるに似て、夜来 吹きて折る 数枝の花』という句があり、語句が非常に似ております」と言い、これを変更するように願ひ出た。すると王禹偁は喜んで、「私の詩の造詣の深さは、とうとう杜甫と暗合するまでになつたか」と言い、さらに詩を作つて、「本より楽天の与には後進為り、敢えて期せんや 杜甫は是れ前身なるを」とうたい、結局詩句を変えなかつた。

文中に引用されている杜甫の詩は、七言絶句の連作「絶句漫興九首」の其二。杜甫が成都（四川省）の浣花溪に草堂を構えて住みはじめた翌年、上元二年（七六二）春の作品である。比較のため、次にその全体をあげる。

手種桃李非無主 手づから種えたる桃李は主無きに非ず

野老牆低還是家 野老 牆 低きも 還た是れ家なり  
 恰似春風相欺得 恰かも春風の相い欺き得たるに似て  
 夜来吹折数枝花 夜来 吹きて折る 数枝の花

確かに、王禹偁の詩とよく似ている。韻字も、第一句は押韻していないが、第二句と第四句は王禹偁の詩と同じである。一方、引用された王禹偁の詩は、大変長い詩題の七言律詩の頸聯（第五六句）で、「もとより自分は白楽天の後進をもって自認しているが、杜甫が自分の前身であることまで、どうして期待したであろうか」という意味である。参考までに、次にその全体を示す。

前賦春居雜興詩二首、間半歳、不復省視。因長男嘉祐讀杜工部集、見語意頗有相類者、咨于予、且意予窃之也。予喜而作詩、聊以自賀  
 前に「春居雜興」詩二首を賦し、間半歳、復た省視せず。長男の嘉祐 杜工部の集を読み、語意の頗る相い類せる者有るを見るに因りて、予に咨り、且つ意らく予之を窃めるなりと。予喜びて詩を作り、聊か以て自ら賀す

命屈由来道日新 命は屈するも 由来 道は日に新たなり  
 詩家權柄敵陶鈞 詩家の權柄 陶鈞に敵す  
 任無功業調金鼎 任として功業の金鼎を調うる無きも

且有篇章到古人 且く篇章の古人に到る有り  
 本与乐天為後進 本より楽天の与には後進為り  
 敢期子美是前身 敢えて期せんや 子美は是れ前身なるを  
 從今莫厭閑官職 今より閑なる官職を厭う莫かれ  
 主管風騷勝要件 風騷を主管するは要件に勝る

詩題の意味は、次の通り。「以前「春居雜興」詩二首を賦し、それから半年の間、再び省みることをしなかつた。長男の嘉祐が杜甫の詩集を読み、語意が非常に似ているものがあるのを見つけたため、私に問いただし、しかも私がそれを盗作したのだと思っていた。私は喜んで詩を作り、少しばかり自分を祝賀した。『宋史』によれば、王禹偁には嘉祐、嘉言という二人の息子がいたという。詩の大意はここでは詳述しないが、尾聯は要するに、閑職にある自分の方が、要路にある高官よりも風雅の道において勝る、というのである。また第五句には、「予謫居してより多く白公の詩を見る」という自注がある。王禹偁は白居易の平明な詩風を自覚的に学び、詩の中でもしばしば白居易に言及している。

次に、陸游『老学庵筆記』『続筆記』の記述を紹介する。

王元之詩云、……語雖極工、然大風折樹而鶯猶不去、於理未通、当更求之。

王禹偁の詩に、……とある。その言葉は大変たくみである

が、強い風が木の枝を折るほどののに、ウグイスがなおも飛び去らないというのは、道理に合わない。さらにこれを考究すべきであろう。

これを見ると、陸游は王禹偁の詩の第四句を、強風が枝を吹き飛ばしても、ウグイスはまだ木の枝に留まっている、と解釈したようであるが、誤解にもとづく揚げ足とりのような感じがしないでもない。強い風がウグイス（の鳴き声）もろとも木の枝を吹き折ってしまった、と解釈すれば、何ら問題ないのではなからうか。

なお『宋詩別裁集』は、王禹偁の作品として、以上の七言絶句の他、巻四に五言律詩を二首、巻五に七言律詩を六首、巻七に五言排律を一首、それぞれ収録している。このうち七言律詩「寒食」は、錢鍾書氏の『宋詩選注』にも収録されている。

## 二、魏野（二首）

魏野（九六〇～一〇二〇）、字は仲先、号は草堂居士、陝州（河南省）の人。『東觀集』がある。北宋初期の代表的な隠逸詩人で、生涯仕官せず、陝州の東郊に住んだ。大中祥符四年（一〇一三）に推薦されて朝廷に召されたが、固辞して赴かなかつた。僧侶、道士、隠者などと広く交わつた他、寇準などの政治家とも作品を応酬した。天禧三年（一〇一九）、六十

歳で没し、秘書省著作郎を贈られた。『宋史』巻四五七に伝がある。

### 尋隠者不遇<sup>(8)</sup> 隠者を尋ぬるも遇わず 魏野

この詩は、『宋詩紀事』巻十および『宋百家詩存』巻二にも収録されている。陝州での作と思われるが、制作時期および相手の隠者が何者であるかについては、未詳。

○○●○○○●

尋真誤入蓬萊島 真を尋ね 誤まりて入る 蓬萊の島

○○●○○○●

香風不動松花老 香風 動かず 松花 老いたり

●○○●○○○

採芝何処未歸來 芝を採るは何処ぞ 未だ帰り来たらず

●○○●○○○

白雲滿地無人掃 白雲 地に滿つるも 人の掃う無し

〔韻字〕 島、老、掃（上声十九・皓韻）

《隠者を訪ねたが、会うことができなかつた》  
仙人になる道を尋ね求めるうちに、間違えて蓬萊の島に迷いこんでしまった。かぐわしい風はそよとも吹き動かず、松の

木の花は年数を経ている。隠者は、靈芝を採るために一体どこまで出かけたものか、まだ帰って来ない。白い雲が地面いつぱいに満ちているが、それを掃除する人もいない。

まず詩題について。「尋隠者不遇」という詩題は、晩唐・賈島の五言絶句と同じであり、内容も、それを意識して書かれていることが明らかである。次に賈島の詩を示す。

松下問童子

松下 童子に問うに

言師采藥去

言う 師は藥を採りに去けり

只在此山中

ただ此の山中に在らんも

雲深不知処

雲深くして処を知らずと

ただし、賈島の詩が五言であるのに対し、魏野の詩は七言である点に特色がある。また、仙界を思わせる隠者の住まいの雰囲気の描写が、より手の込んだものとなっている点にも注目したい。

魏野の詩に戻り、第一句。「尋真」は、仙道を尋ね求めること。

「蓬萊島」は、東の海上にあるという、仙人が住む島。仙人の術を夢中で求めているうちに、いつの間にか仙人の島に迷い込んでしまった、というのである。もちろん事実ではなく、隠者の住まいの超俗的な雰囲気を、詩的に誇張して表現したものであろう。

第二句。「香風」は、かぐわしい風。神秘的な雰囲気を醸し出す。「松花」は、松の木の花。松黄ともいう。滋養強壯などの効能があり、「松花酒」という酒の材料ともなる。また松は千年に一度だけ花を咲かせるといふ伝説もあり、詩において「松花」は仙界や不老長寿などの幻想的なイメージに関連させてうたわれる場合が多いようである。一例として、中唐・李賀の「神弦別曲」詩に次のようにある。

巫山小女隔雲別

巫山の小女 雲を隔てて別れ

松花春風山上発

松花 春風 山上に発く

第三句。「採芝」は、靈芝を採集する。靈芝は和名をヒジリダケというキノコの一種で、長生の効能がある神草と考えられていた。この句は、賈島の詩の「言師采藥去」と対応している。

第四句。「白雲满地」という表現は幾分奇異な感じを受け、が、仙界のような隠者の住居を想像をまじえてうたっていると考えれば、驚くにはあたらない。要するに、隠者の住まいが高い山の上にあることを、誇張して表現したかったのであろう。この句は、賈島の詩の「雲深不知処」と対応している。また晩唐・杜牧の七言絶句「山行」の次のような表現も、高い山の上に住む隠者の存在を暗示するものと考えられよう。

遠上寒山石径斜

遠く寒山に上れば 石径 斜めなり

白雲生処有人家 白雲 生ずる処 人家 有り

この他、「雲房」「雲洞」「雲屋」などの語がいずれも隠者の住まいを意味することからも、(白)雲は隠者の縁語であることがよくわかる。「無人掃」は、地面に満ちている雲を掃除する者は誰もいない、の意。

形式の上でも、この詩には興味深い特色がある。まず一つは、平字ではなく仄字で押韻されていること。五言絶句の場合には、仄字の押韻はさほど珍しくない。孟浩然の「春暁」、王維の「竹里館」、柳宗元の「江雪」などの唐詩の名作は、いずれも仄字で押韻している。しかし七言絶句の場合、仄字で押韻した作例は多くはない。比較的知られる作品としては、次に示す中唐・白居易の「村夜」がある。

霜草蒼蒼虫切切 霜草 蒼蒼 虫 切切  
 村南村北行人絶 村南 村北 行人 絶  
 独出前門望野田 独り前門に出でて野田を望めば  
 月明蕎麦花如雪 月明に蕎麦花 雪の如し

この詩は、切、絶、雪と、仄字(入声)で押韻している。あるいは魏野は、前掲の賈島の詩が仄字で押韻しているのにならったのかも知れない。もう一つの特徴は、四句とも二、四、六の平仄がすべて「平仄平(○●○)」というパターンになっ

ており、反法も粘法も存在しないことである。これまた破格の作例であろう。

なお『宋詩別裁集』に収録された魏野の作品は、この七言絶句一首のみである。

### 三、林逋(一首)

林逋(九六七〜一〇二八)、字は君復。錢塘(浙江省杭州)の人。『林和靖先生詩集』がある。北宋初期を代表する隱逸詩人。若くして身寄りがなく貧しい中で、刻苦して学問に励んだ。生涯仕官せず、杭州西湖のほとりにある孤山に庵を構えて隱棲生活を送った。また生涯結婚せず子供もなかったが、孤山に梅を植えて鶴を飼い、当時の人はこれを「梅妻鶴子」と称した。天聖六年(一〇二八)に六十二歳で没し、和靖先生と諡された。『宋史』卷四五七に伝がある。

書孤山隱居壁<sup>9)</sup> 孤山の隱居の壁に書す 林逋

この詩は、孤山での作であることは間違いないが、制作時期は不明。『宋詩鈔』の『和靖詩鈔』及び『千首宋人絶句』卷二にも収録されている。ただし両書とも詩題を「孤山隱居書壁」とする。

○●●○○●●●

山木未深猿鳥少

山木 未だ深からず 猿鳥 少なし

●○○●●○○○

此生猶擬別移居

此の生 猶お別に居を移さんことを擬す

●○○●●○○○

直過天竺溪流上

直ちに天竺の溪流の上を過ぎ

●○○●●○○○

独樹為橋卜結廬

独樹を橋と為し 廬を結ばんことを卜せん

〔韻字〕 居、廬（上平声六・魚韻）

《孤山の隠居所の壁に書きつけた詩》

この孤山は、樹木もさほど深くなく、猿や鳥も多くは棲んでいない。そこで、またどこか別の場所に住まいを移して、この人生を送りたいと考えている。天竺山の溪流のほとりをどこまでもさかのぼって行き、一本の木を橋にして、新しい草庵を構える場所を占うことにしよう。

まず詩題について。「書孤山隠居壁」は、孤山の隠居所の壁に詩を書きつける、またその詩の意。「孤山隠居書壁」の場合、「孤山の隠居にて壁に書す」と訓読することになるが、意味はさほど違わない。

第一句。『宋詩鈔』および『千首宋人絶句』は、「山木」を「山水」とする。

第二句。「此生」は、この人生。「擬」は、くしようとする。「別移居」は、他に住まいを移す。

第三句。「過」は、この場合平字で読む。そうでないとい平仄が合わない。「天竺」は、杭州西湖の西側にある山の名。上、中、下の三つの天竺寺があり、古くは仏教の名山として知られていた。「上」は、川のほとり。

第四句。「卜」は、草庵を構える場所を占う、の意。『宋詩鈔』および『千首宋人絶句』は、「卜」を「小」とする。

この詩は、自分が現在住んでいる孤山の環境に飽き足らず、もつと奥深い山中に安住の地を求めたい、という心境をうたっている。林逋の墓は今でも孤山にあるから、もちろん実現はしなかつたであろうが。なお『宋詩別裁集』は林逋の作品として、この七言絶句の他、巻五に七言律詩三首を収録している。その中の一首「山園小梅」<sup>(10)</sup>は林逋の代表作であり、詠梅の絶唱として古來定評がある。

#### 四、宋祁（一首）

宋祁（九九八〜一〇六二）、字は子京、開封雍丘（河南省杞県）の人で、後に安州安陸（湖北省）に移った。『景文集』がある。天聖二年（一〇二四）、兄の宋庠と共に進士に合格し、「大小宋」

と号した。翰林学士、史館修撰に任命され、歐陽修と共に『新唐書』の編集に携わった。嘉祐六年（一〇六一）、六十四歳で没し、景文と諡おくりなされた。『宋史』巻二八四に伝がある。

皇帝閣春帖子詞〔一〕 皇帝閣の春帖子の詞 宋祁

この詩は、作者が都で翰林学士をつとめていた時期の作品と思われるが、詳細な制作時期は不明。『宋詩別裁集』の他、『宋百家詩存』巻三にも収録されている。

●○○●○○●  
望春台下春先到 望春台下 春 先に到り  
●○○●○○●  
獵獵青旗倚漢宮 獵獵たる青旗 漢宮に倚る  
●○○●○○●  
水自北涯生暖溜 水は北涯より暖溜を生じ  
○○○●○○○  
花従東面受和風 花は東面より和風を受く

〔韻字〕 宮、風（上平声一・東韻）

《皇帝閣の春帖子のために書いた春を祝ううた》

望春台の下に春はまつ先に訪れ、風に吹かれてひるがえる青

い旗が、漢の宮殿に寄り添っている。川の水は北の果てから温かくなり始め、花は東の側からなごやかな風を受けている。まず詩題について。「皇帝閣」は、皇帝の住む樓閣。「春帖子詞」は、宋代、立春の日に翰林院の高官たちが春を祝うた（うた）を書いて、帳簿に記したものの。「帖子」は、帳簿。清・趙翼の『陔余叢考』巻二十四「帖子詞」の項目に詳細な説明があるので、次に示す。

宋時八節内宴、翰苑皆撰帖子詞。如歐陽公、司馬溫公集中皆有之。『丹陽集』載春帖子詞尤多。……皆壯麗可誦、見太平景象。

宋代の八節（立春、立夏、立秋、立冬、春分、夏至、秋分、冬至）における内々の宴会の際には、翰林院の高官たちは皆「帖子詞」を賦した。たとえば歐陽修や司馬光の詩集には、いづれもそうした作品が見える。『丹陽集』（北宋・南宋・葛勝仲撰）に掲載された春帖子詞が、とりわけ多い。……いづれも壯麗で愛唱すべき作品であり、太平の時代の気風が感じられる。

七言絶句の形式でありながら「詩」と言わず「詞」というのは、音楽に合わせて歌われたためであろうか。それとも、比較的軽い創作、という意味合いを込めたものなのであろうか。と

もあれ、ここでは「うた」と訳しておいた。宋祁のこの詩は、十二首連作の其五。十二首のうち、其一〜其三は五言絶句、其四〜其六は七言絶句、其七〜其十は五言絶句、其十一および其十二は七言絶句、という構成になっている。

第一句。「望春台」は、唐代の樓閣の名。ここでは、それを借りて北宋の宮殿をさす。初唐・宋之問の七言絶句「苑中遇雪 応制（苑中にて雪に遇い制に応ず）」詩に次のようにある。「詰旦」は、早朝。「旂」は、「旗」に同じ。

紫禁仙輿詰旦来 紫禁の仙輿 詰旦に来たり  
青旂遥倚望春台 青旂 遥かに倚る 望春台

第二句。「獵獵」は、物が風に吹かれてひるがえるさま。「青旗」は、青い旗。酒屋の旗、という意味もあるが、そう解釈したのでは、宮中の宴会でうたう歌詞としてはそぐわない。青は五行で春を表す色であることから、春の旗と考える方が穏当であろう。なおこの表現は、前掲宋之問の詩句を念頭に書かれていることが明らかである。「漢宮」は、宋代の宮殿を婉曲に表現したもの。

第三句。「北涯」は、北の果て。「暖溜」は、温かい水のたまり。春が訪れ、川の水が北から次第に温かくなり始めることを言う。

第四句。「東」は、五行で春を象徴する方向。したがって東

風は、春風を意味する。「和風」は、なごやかな風。以上の第三句と第四句は、端正な対句で構成されている。

なお『宋詩別裁集』は、宋祁の作品として、この七言絶句の他、巻四に五言律詩を五首、巻五に七言律詩を五首、巻七に五言排律を三首、それぞれ収録している。このうち七言律詩「落花」は、宋祁の代表作として知られる。

## 五、石介（一首）

石介（一〇〇五〜一〇四五）、字は守道、一に字は公操、兗州奉符（山東省泰安の東南）の人。『徂徠集』がある。徂徠山のふもとで学問を講じ、徂徠先生と呼ばれた。天聖八年（一〇三〇）の進士で、各種の官職を歴任した後、慶曆二年（一〇四二）に国士監直講となる。その後直集賢院に抜擢され、ほどなくして通判濮州となるが、慶曆五年（一〇四五）、赴任する前に四十一歳で没した。『怪説』などの文章を著して宋初の浮華な文風を批判した、北宋の文体改革運動の先駆者の一人である。『宋史』巻四三二に伝がある。

泥溪駅中作<sup>(12)</sup> 泥溪の駅中にて作る 石介

〔自注〕

嘉陵江自大散関与予相伴〔別〕二十余程、至泥溪背〔偕〕

予去、因有是作。

嘉陵江は大散関より予と相い伴うこと二十余程なるも、泥溪に至るや予に背きて去る、因りて是の作有り。

呉戦壘『千首宋人絶句校注』（一九八六年五月、浙江古籍出版社）によれば、宝元元年（二〇三八）、石介は嘉州（四川省乐山）軍事判官に任命され、夏に蜀に入った。この詩は、その道中で作られたものであるという。時に作者三十四歳。この詩は、『宋詩鈔』の『徂徠詩鈔』及び『千首宋人絶句』巻二にも収録されている。

●●○○●●

山駅蕭条酒倦傾

○○○○●●○○

嘉陵相背去無情

○○●●○○○○

臨流不忍輕相別

●●○○●●○○

吟聽潺湲坐到明

〔韻字〕 傾、情、明（下平声八・庚韻）

《泥溪の宿場駅で作った詩》

〔自注〕嘉陵江は、大散関から二十程余りの間、ずっと私と一緒に歩いて来てくれたが、泥溪駅まで来た所で、私に背を向けて去って行つた。そこでこの詩を作る。

山中の宿場駅はひっそりとも寂しく、一人で酒を傾けるのにも倦み疲れた。嘉陵江はここで私に背を向けて、無情にも離れて行こうとする。川の流れに臨んで、軽々しく別れるにしのびず、詩を吟じながらせせらぎの音を聴き、そのまま夜明けを迎えた。

まず詩題について。「泥溪」は、地名。四川省宜賓の西北一八〇里の所にある。「駅」は、宿場駅。

次に自注について。「嘉陵江」は、長江の上流の支流。陝西省鳳凰の東北にある嘉陵谷に源を発し、四川省重慶で長江に流入する。「大散関」は、陝西省宝鸡西南の大散嶺の上にある関所で、渭南平原から秦嶺に入る要所。「二十余程」は、宿場駅の数にして二十余りの道程、という意味であろうか。なお『宋詩別裁集』影印本では「伴」は「別」、「背」は「偕」となっている。影印本を底本とする以上、その表記に従うのが本来であるが、これでは意味が通じにくい。そこでこの部分に限り『全宋詩』の表記に従い、影印本の表記を「」に入れて示した。

第一句。「山駅」は、山中にある宿場駅。「蕭条」は、ひっそりしても寂しいさま。「倦」は、倦み疲れる。「傾」は、酒壺

を傾ける。東晋・陶淵明「飲酒」詩の其七に、次のようにある。

一觴雖独進 一觴 独り進むと雖も  
杯尽壺自傾 杯 尽くれば 壺 自ら傾く

第二句。「嘉陵」は、嘉陵江。第三句は、特に説明を要しない。ただ、第二句で「相背」とうたい、第三句で更に「相別」とうたっているのは、やや難点と言うべきかも知れない。

第四句。「吟」は、詩を吟じながら。「潺湲」は、川の水の流れる音。「坐」は、そのまま。「明」は、夜明け。

この詩は、川の流れをまるで親友か恋人のように見たて、それとの別れを惜しむという、大変珍しい詩である。自然の擬人化を好む、宋詩ならではの表現と言えよう。比較のため、中唐・元稹の七言絶句「嘉陵駅二首」の其一を、次にあげてみよう。

嘉陵駅上空床客 嘉陵駅上 空床の客  
一夜嘉陵江水声 一夜 嘉陵 江水の声  
仍对牆南満山樹 仍お対す 牆南 満山の樹  
野花撩乱月朧明 野花 撩乱し 月 朧に明らかなり

この詩は石介の詩と同様に、嘉陵江のほとりの駅舎で寝つかれず、一晚中水の音に耳を傾ける、という情景をうたっている。あるいはこの詩は、何らかの形で石介に影響を及ぼしているの

かも知れない。しかし石介の詩と比べてみると、元稹の詩はまさに普通の情景描写にとどまっており、川の水を擬人化し、別れるにしのびない、という心情を吐露するところまでは行っていない。吉川幸次郎氏の『宋詩概説』には、「宋詩が、しばしば自然を擬人化し、自然をも人間の世界にひきこむことは、面白いことである」という指摘があるが、この石介の詩は、その好例としてあげることができよう。

なお『宋詩別裁集』に収録された石介の作品は、この七言絶句一首のみである。

### おわりに

以上、『宋詩別裁集』巻八所収の七言絶句のうち、最初の六首を簡単に紹介した。これらの詩はいずれも、錢鍾書氏の『宋詩選注』には収録されていない作品ばかりである。<sup>(1)</sup> 作業に際しては細心の注意を払ったつもりではあるが、見落としや不備な点は多々あろう。大方の御批評をお待ちする。

### 注

(1) 『宋詩別裁集』については、拙稿『宋詩別裁集』に収録された陸游の七言絶句(二〇〇六年七月発行、愛知大学語学教育研究室「言語と文化」第十五号)をあわせて参照されたい。

『宋詩別裁集』に収録された北宋初期の詩人たちの七言絶句

- (2) 王禹偁「泛吳松江」……『全宋詩』卷六十三。第二冊、六九五頁。
- (3) 『世說新語』識鑑第七……張季鷹辟齊王東曹掾、在洛、見秋風起、因思吳中菰菜、蓴羹、鱸魚膾、曰、「人生貴得適意爾、何能羈宦數千里以要名爵」、遂命駕便婦。俄而齊王敗、時人皆謂為見機。
- (4) 『全宋詩』は詩題を「赴長洲原作」とし、詩にも文字の異同がある。しかも南宋・范成大の『吳郡志』から三首を補い、合計五首の連作としている。
- (5) 王禹偁「春居雜興」……『全宋詩』卷六十四。第二冊、七二二頁。『全宋詩』は二首連作の後にさらに二首を補い、四首連作とする。
- (6) 『宋詩紀事』卷四……廬州妖尼道安誣訟徐鉉、禹偁請論道安罪、貶商州團練副使。
- (7) 『全宋詩』は、魏野の生卒年を（九六〇～一〇二〇）とし、「天禧三年（一〇一九）十二月九日卒、年六十」と記す。一見矛盾のようにであるが、亡くなったのが年末のため、西曆に換算すれば翌年の春となり、一年ずれることになるのであろうか。
- (8) 魏野「尋隱者不遇」……『全宋詩』卷八七。第二冊、九六九頁。
- (9) 林逋「書孤山隱居壁」……『全宋詩』卷一〇八。第二冊、一二三二頁。
- (10) 林逋の「山園小梅」については、松浦友久編『統校注唐詩解積辭典〔付〕歷代詩』（二〇〇一年四月、大修館書店）に詳細な注釈があるので、参照されたい。執筆担当は内山精也氏。
- (11) 宋祁「皇帝閣春帖子詞」……『全宋詩』卷二二三。第四冊、二五七七頁。『全宋詩』は詩題を「春帖子詞」とし、副題を「皇帝閣十二首」とする。
- (12) 石介「泥溪駅中作」……『全宋詩』卷二七一。第五冊、三四三七頁。
- (13) 『宋詩概説』（二〇〇六年二月、岩波書店）序章「宋詩の性質」の第十二節「宋詩における自然」を参照のこと。
- (14) 『宋詩選注』は、王禹偁、林逋の作品を収録しているが、本稿で紹介した作品は収録していない。また、魏野、宋祁、石介の作品は収録していない。